CLOSE-UP INTERVIEW

株式会社高橋書店 書籍事業部 編集部 山下 利奈さんに聞く

読者の方一人ひとりの思いと声を次の一冊に詰め込んでいけたら

［聞き手］川島 葵さん フリーアナウンサー

やました・りな
1986年神奈川県生まれ。成城大学文芸学部マスコミュニケーション学科卒業。2008年に（株）高橋書店に入社し、1年間、販売部で東京都の書店営業を担当。最優秀新人賞を獲得。その後、書籍編集部に異動し、生活実用書・児童書の編集を手掛ける。

シリーズ累計420万部『ざんねんないきもの事典』シリーズ

川島　池袋の街を一望できるサンシャイン60にオフィスのある高橋書店。高橋書店といえば、なんといっても「手帳は高橋」として手帳が有名ですが、実は多くの実用書も出版されています。子どもから大人まで楽しめると話題の『ざんねんないきもの事典』も高橋書店が出版している大人気シリーズです。今日はそのシリーズを手がけた山下利奈さんに、シリーズ誕生秘話や、出版社を志したきっかけなどを伺いたいと思います。シリーズは、五冊目となり、巻を重ねてもその人気は衰えませんね。私も、「ざんねんな」という視点に驚き、その視点も楽しみながら読ませていただきました。

山下　ありがとうございます。実際にこの本を手に取って読んでくださっている方から感想をいただけるのは、とてもうれしいです。

川島　シリーズ累計420万部とは、驚くべき数字ですね。発売のたびに新たな衝撃があり、発見があります。ミニドラマが放送されたり、ざんねんないきもの展という展示が開催されたりと、事典からいろいろな形で楽しみが広がっていますね。新たな巻の発売を心待ちにしている読者の方々も多いのではないでしょうか。

山下　そうですね。ありがたいことに、一冊目から五冊目まで全て揃えられているという方もたくさんいらっしゃいます。編集部にはアンケートはがきも3000通以上届いており、読者の年齢層も4歳から90代までと、とても幅広い年代の方に楽しんでいただけているようです。

川島　地球上にはさまざまな生き物がいますが、それでもその中から本書に載っているような「くすりと笑える」「面白い、衝撃的」なエピソードを集めるのは、時間がかかりそうです。また、読者の心をくすぐる工夫が各ページの随所に施されているんですね。

山下　巻を重ねてもクオリティーが下がることのないようにというのは強く意識しています。また、アンケートはがきなどにも目を通し、子どもたちに喜んでもらえるような工夫、誰かに話したくなるようなエピソードを盛り込んでいきたいと常に考えています。

ものづくりに関わりたいと考え メディアを学べる学科に進学

川島　現在は編集者として本を作ることをお仕事にされていますが、山下さんが書籍に関わるお仕事に就きたいと考えたきっかけや、出版社に入社されたいきさつを教えていただけますか。

山下　小さいころから本が好きでした。絵本や物語もたくさん読みましたが、私の場合、なぜか家にあった名づけの本や料理の本や事典など、生活実用書を手に取って「こんな名前があるんだ」「美味しそう」と眺めるのが好きでした。

川島　高橋書店は、生活実用書も多く出版されていますので、偶然のつながりにしてもご縁を感じますね。本づくりに携わりたいと考えたのはいつ頃からだったのでしょうか。

山下　高校生の頃から、たくさんの人に楽しんでもらえるようなものを作る仕事をしたいと考えるようになりました。それで、メディアについて学ぼうと思い、成城大学の文芸学部、マスコミュニケーション学科に入学しました。

川島　大学ではどのようなことを学ばれたのでしょうか。

川島 葵さん

山下　テレビ、新聞、雑誌などさまざまなメディア、コンテンツについてその歴史から学びました。大学時代に学んだアンケート調査の方法などは、今の仕事にも役立っています。

川島　大学での学びがお仕事にも生きているんですね。

山下　大学の授業で使っていた教科書、例えば出版についての本や統計学の資料など、今でも時々見直すことがあります。

川島　そのことを知ったら、当時山下さんを受け持った先生方は喜ばれるでしょうね。大学時代、サークルやクラブ活動などには所属していましたか。

山下　女子タッチフットボール部に所属していました。

防具とタックルのないアメフトのようなスポーツです。体育会の部活なので、大学時代の思い出は、部活にまつわることが多いです。朝練に出て、そのままジャージで授業に出るという日々でした。

川島　では、大学時代の山下さんを知る人は、ジャージの印象が強いかもしれませんね。

山下　部活では一生付き合える仲間ができました。就職活動でも胸を張って「これをやった」と言えましたし、いまでも「あの時あれだけできたんだから」と思えます。

書店とのつながり
現場を知ることの大切さ

川島　高橋書店には、２００８年に入社されていますね。入社1年目は販売部に所属されていたそうですが、販売部では、どのようなお仕事をされていたのでしょうか。

山下　当社では、入社1年目の社員は、ほぼ全員販売部の所属になります。担当エリアの書店を回って、ポップなどを置かせていただきながら、自社の本や手帳がお客様に届く現場を学びます。

川島　山下さんはどのようなエリアを何店舗くらい担当されていたのですか。

山下　東京で１５０店舗ほど担当がありました。1カ月かけて担当エリアの店舗を回るのですが、当社はエントリーシート対策やＳＰＩなど、就職活動関連の書籍も多く、大学生協にもずいぶんお世話になりました。

川島　実際に本を売る書店を回って、どんなことを感じましたか。

山下　やはり、本を売ってくれるのは書店であり、書店員さんであるということは強く感じましたし、この1年の経験があったからこそ、お客様の手に本がどのように

山下 利奈さん

届いているかがわかりました。お店のどこに本が置かれるのか、どういうコーナーを作って本が目立つ工夫をしてくれているのかなど、お店ごとの工夫があるからこそ、本を手に取ってくれる人がいるんだなと。『ざんねんないきもの事典』も、児童書というカテゴリーでありながら、書店員さんが「これは大人が読んでも面白い」と言って、売り場を拡大してくれた書店も多くありました。作った本が、書店に並んでから、書店や書店員さんに育てられるということもよくあります。

作った本を誰かが手に取ってくれる喜び

川島 販売部を経て2年目からは、編集部への所属となりましたが、山下さんが最初に手掛けられたのは、どんな本だったのでしょうか。

山下 最初に手掛けたのは、『話し方・マナー・演出のコツがわかる　乾杯・献杯・締めのあいさつ』という、当社の定番シリーズとなっていたスピーチ本です。自分で企画から考えたのは、親子で遊べるおりがみの本で、これは現在、シリーズ累計60万部のロングセラーとなっています。

川島 企画が上がってから、一冊の本になるまでは、どのくらいの時間がかかるのですか。

山下 本にもよるのですが、当社ではだいたい半年から1年という時間をかけて作っています。出来上がった時の達成感や書店に並んだ時の喜びは大きく、店頭で自分の作った本を手に取ってくれる人がいると、そばに行って話しかけたくなってしまいます。

川島 大切に温め、育てて生み出した一冊ですからね。

山下 実際に自分が手がけた本を手に取ってくれる人の顔を見ることができると、やはりうれしいですね。今は、インターネットなどでも簡単に本を購入することができますが、読者に会える書店も、大切にしたいと思います。

ざんねんなエピソードが一冊の本になるまで

川島 『ざんねんないきもの事典』の企画は、どのように生まれたのですか。

山下 当社からは『すごい動物大図鑑』や『びっくり昆

虫大図鑑』など、生き物を扱ったいわば王道の図鑑も多く出版されています。その流れがあった中で、「ここには載せられないけれど、このエピソード面白いよね」「この話、知られていないけど笑えるよね」というものがたくさんあることに気づきました。王道の図鑑のこぼれ話のようなエピソードから、〝ざんねん〟というワードは部内で割と以前から出ていたのです。

川島　王道とはまた違った角度から生き物たちを見ているのが特徴的ですよね。

山下　そうですね。ただ、タイトルに「ざんねん」というワードをつけることには、社内でも賛否両論ありました。でも、「この〝ざんねん〟は、決して生き物たちを馬鹿にしているのではなく、愛情を込めて、意外な一面に光を当て〝ざんねん〟な部分から生き物に興味を持ってもらいたい」という思いを伝えて出版に至りました。

川島　どのエピソードもとても興味深く、面白いのですが、特に読者から人気のある生き物やエピソード、山下さんのお気に入りがあれば教えてください。

山下　メジャーな生き物ではないけれど、読者に人気なのは、深海魚の「ニュウドウカジカ」です。つかまって陸に上がると、ぶよぶよでたらこ唇のおじさんのような顔になってしまうという生き物ですね。私がひとめぼれして、どうしても載せたいと思ったエピソードは「クアッカワラビーは、神対応すぎて心を病みがち」というものです。オーストラリアに住むこの動物は、にっこりと笑っているように見えて、人懐っこいものの、ストレスも溜めがちだそうです。

川島　知っている生き物の知らない部分はもちろん、まだまだ知らない生き物との出会いもたくさん詰まっていて、奥深いですね。

進化の歴史の面白さ
個性が光るときがくる

川島　「生き物たちのざんねんな部分は『進化の足跡』」という監修の今泉忠明先生の言葉も印象的でした。

山下　そうですね。「ざんねん」の秘密は「進化」にあると本にも書いているように、進化の歴史が本書のベースになっています。

川島　必ずしも強い生き物が生き残ってきたわけではな

い、環境によって強いとか弱いは簡単にひっくり返るし、すごい部分と同じくらいにざんねんな部分も大切だというメッセージには勇気をもらえますね。

山下 生き物たちの多様性や個性を知ってほしいという思いもあります。人間の世界でも、学校や会社で「もっと頑張りなさい」と言われたり、「頑張らなきゃ」と考えていたりすることも多いと思いますが、違う面から見たら、一人一人すてきな個性があって、その個性はいつか必ず輝くんだよということも伝えられたらと考えています。

川島 読み進めていくと、本当に生き物たちへの興味と愛情が湧いてきます。面白くて愛しくて、もっともっとその生き物について調べたり、動画を見たり、動物園や水族館に行ってみたくなったり。行動したくなる本というんでしょうか。

山下 例えば動物園に行って、ただ、キリンを見るだけではなく、「キリンは長い舌で鼻くそをほじる」というエピソードを知っていれば、「いつ鼻くそをほじるかな」という楽しみを持ちながらキリンを見ることもできます。たとえ、その瞬間を見ることはかなわなくても、「キリンの舌って本当に長いんだ」ということは、確認できるはずです。そうやってたくさんの人に、もっと生き物について興味を持っていただけたら、うれしいですね。

工夫しただけ手ごたえがある 進化させながら育てていきたい

川島 一読者として、もっともっと生き物のことを知りたい、続きが待ち遠しいと思ってしまいます。

山下 これまでは、1年に一冊のペースで出してきましたが、ネタ探しには、時間と労力がかかり、制作の半分はネタ探しに費やしています。

川島 一冊につき、どのくらい探すのですか。

山下 だいたい800くらいでしょうか。それを100に絞って、そのあとから原稿を依頼したり、イラストを発注したりという実作業になります。

川島 写真でなく、あえてイラストというのも面白いと思いました。その辺りも編集のこだわりなのでしょうか。

山下 そうですね。先ほど、行動したくなるとおっしゃっていただきましたが、写真ではなく、イラストにすること

で、読んでくださっている方の想像力を掻き立てたいという狙いもあります。生き物のエピソードに出会って、じゃあ、実際にはどんな姿なんだろうと図鑑を手に取って開いたり、鳴き声の聞ける動画を調べたりして、もっとその生き物について、興味を持ってほしいと考えています。

川島　パラパラ漫画がついていたり、クイズのようなページがあったり、何かを探す仕組みがあったりと、本書は生き物のエピソードを読むだけにとどまらない楽しさが詰まっています。

山下　その工夫に気づいてくれる子どもたちから、アンケートはがきなどが届くと、本当にうれしいですね。工夫しただけ、すみずみまで考えた甲斐があるなと。

川島　どこから読んでもいいし、読むたびに何か新たな発見があったりして、本当に小さな子どもからお年寄りまで、楽しめると思います。

山下　子どもがあまりにもげらげら笑いながら読んでいるから、気になって手に取ったら、お父さんお母さんがはまってしまったとか、孫にプレゼントしようと思って買ったら面白くてプレゼントする前に全ページ読んでしまったなどという、うれしいお声もいただきます。

川島　まさに世代を超えて、3世代で楽しめる本ですね。

山下　楽しみに読んでくださる読者の方々の期待に応えていけるよう、ざんねんシリーズも工夫を重ね、小さくてもどこかしら進化させながら作っていきたいです。

川島　本当に面白いものは、子どもも大人も一緒に楽しめるということがよくわかりました。本日は楽しいお話、本当にありがとうございました。